

マーガレット・リュートブック 「宮廷」奥の音楽

演奏学科音楽専修 2年

ステファニー・栄実・
ウィットマー

皆さんは、「リュート」という弦楽器の名前や音色を耳にしたことがありますか。学内公開レッスンや演奏会などで、リュートを含むアンサンブルの演奏を聴いたことのある方もいるのでは。

私は12歳の時に、父が買ってくれたCDで、はじめてイギリス・エリザベス朝に流行ったリュートソングを聴きました。エリザベス・ケニーの奏でるリュートの音は、どこからともなく映る光のようで、歌い手の声と溶け合うハーモニーにうっとりとし、聴き惚れたのを覚えています。リュートの柔らかい響きで奏でられる和音の奥深い表情に、新鮮な感動をおぼえました。

リュートは、ルネサンス〜バロック期にかけて、歌の伴奏や通奏低音に欠かせない楽器でした。リュートと歌のアンサンブルで素敵な作品はいっぱいありますが……リュートの音そのものを楽しんでいただきたいと思い、ここではあえて、リュートソロのCDをお勧めします。

フランスからイギリスの宮廷に伝わったリュートは、16世紀に「エリザベス朝リュートの黄金時代」を迎えました。当CDの曲集は、それに続くジェームス1世時代、17世紀初頭

のものです。宮廷で仮面劇や舞台上演が盛んに行われている一方で、マーガレット・ボード夫人をはじめとする奥方達による、内輪の演奏会もまた盛んでした。彼女達は幼いころから、ヘンリー王子お抱えの楽師達に手ほどきを受け、リュート、ヴァージナルや歌において優れた技巧を持っていたようです。

MLリュートブックは、フランスから招かれていた楽師を含む15人程のリュートイスト（作曲者）が、お互いのメロディーを用いたり、論じ合ったりしながら作った曲集であり、マーガレット夫人というパトロンのもとで完成させられたのでした。

どの曲のメロディーも魅力的で、なんといつでもケニー氏のスパイスの効いた装飾が楽しく、聴くたびに新たな面白さに気付かされ、ますます好きになります。

リュートの音色は、静かな夜にリラクセスして聴くのにピッタリな音楽と言えるでしょう。皆さんも、ぜひ色彩豊かなリュートの音色を味わってみてはいかがでしょうか。



請求記号●XD63346
Flying horse: music
from the ML lutebook
(Hyperion:CDA67776)

●Stephanie えいみ Witmer 図書館には他にも、P. オテット、J. リンドベリや今村泰典のような個性的な奏者による、様々なリュート作品の録音が置いてあります。興味の湧いたものからどうぞ！

楽譜「解き放たれた音楽」の追求 ―谷川×鈴木作品を通して―

演奏学科鍵盤楽器専修(ピアノ) 2年

小川太一

詩人の谷川俊太郎氏と作曲家の鈴木輝昭氏という「黄金コンビ」は合唱界では大変人気である今年度、第77回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲である《いのち》も谷川×鈴木コンビで制作されており、丁度良い機会があるので両氏による作品を採り上げることにした。

私が初めて鈴木氏の作品と出逢ったのは中学生の時であり、今回採り上げる、混声合唱とピアノのための《サーカス》であった。組曲は《奏楽》《道二題》《サーカスI》《道化I》《サーカスII》《魔術師―空中ブランコ》の4曲から成る《奏楽》《道二題》では、時間的推移を求心的に辿つてゆく持続を指向し、《サーカスI》《サーカスII》では、空間に放たれる響き、絵画的な修辭法を構造上のコンセプトとしたと鈴木氏は語っている。一見このコンセプトは非常に複雑であるかのように思えるが、谷川氏の詩を読めば読む程に、鈴木氏の曲を聴けば聴く程に腑に落ちてくる。この組曲の最大の魅力であるう、詩と音楽という2つの要素が融合し合い、また或る時には其々の方向性を持つて対立し合うことが感じ取れるのである。

この作品は出雲市立第三中学校合唱部による委嘱作品であり、鈴木氏が中学校混声合唱のために書いた初めての組曲作品である。中学生が

歌うということは氏にとつて制約的な意味ではなく、寧ろ自由に解き放たれた音楽の在り方を追求することなのだという。それは楽譜を見ると明らかである。一切妥協のない、寧ろ挑戦的とも言える鈴木輝昭の音楽世界が拡がっているのである。また、鈴木氏の作品の特徴と言えは技巧的なピアノであるが、この作品も例外ではない。私は氏の合唱作品はピアノを伴奏と捉えるのではなく、ひとつの確立されたパートとして捉えるべきであると考え。非常に技術の要るところではあるが、混声四部合唱とピアノという5つのパートが其々に確固たる意志と方向性を確立した時に、この作品の持つ想いや願いの世界が存分に表現されるであろう。

知識乏しい私の文章と限られた字数の中ではこの作品の持つ魅力を存分にお伝えすることが出来ないことをとても心苦しく思う。是非実際の演奏を聴いて頂きたい。因みに私はこれまでに《サーカス》を数多くの団体の演奏で聴いてきたが、委嘱初演の出雲市立第三中学校合唱部（指揮・吉川里美／ピアノ・吾郷明美）より素晴らしい演奏には未だ出逢ったことがないことも記しておきたい。



請求記号●F24-960
『混声合唱とピアノのためのサーカス』全音

●おがわたいち 合唱とお酒をこよなく愛する合唱オタク。他にもお薦めしたい合唱作品が山ほどあるので、一緒に飲みながら語れる方募集中心(笑)。

CD

心に残る演奏

音楽教育学科音楽教育専修 2年 房野雄輝

音楽を勉強する者にとつて、憧れの演奏家、好きな作曲家、心に残る素晴らしい演奏…などといった存在は誰にでもあるのではないのでしょうか。その演奏や作曲家達といった、目標や目指しているものがあるからこそ、音楽を続けていくという方も多いのでは、と思います。

たしか私がまだ中学生の頃でした。偶然に回したテレビ番組で、ある日本人の女性ピアニストの方がピアノ協奏曲を演奏されていました。たしかベートーヴェンの4番の協奏曲だったと思います。まるで春風のようなピアノニッシモ、かと思いきや深い海のようなフォルテ。まだまだ音楽やピアノについて知らない私にとつて、ピアノの一つ一つの音が新鮮で輝いていて、言葉で言い表せないくらい感動したのを今でもはつきりと覚えています。このベートーヴェンこそが、私が初めて聴いた小菅優さんの演奏であり、この演奏がきっかけで、私は彼女のファンとなりました。

今回紹介させていただくこのCDですが、幼い頃からヨーロッパで演奏活動をしていらした小菅さんの日本のデビューアルバムです。また私自身が、リストという大作曲家を好きになるきっかけとなったものでもあるので、個人的にとつても思い出深い1枚です。

皆さんもご存知の通り、リストはバガニーニ

がヴァイオリンで実現した高度なテクニクを、ピアノ独自の新しい技巧によって表現しようと考えました。そしてこの試みの中、超絶技巧練習曲集も作曲されました。彼のピアノ作品はスケールが大きく、技術はもちろんのこと、表現においても高度なテクニクが求められます。

このCDに収められている演奏はまさに超絶技巧の名に相応しいものです。《前奏曲》の堂々としたダイナミックな始まり。《鬼火》のどこか不気味さを感じさせる軽やかな細かい動き。《狩り》の曲全体を支配する野生的な激しさ。《夕べの調べ》の遠くから鳴り響いてくる教会の鐘のような、優しく抒情的で深い旋律。どの曲も聴き応えがあり、小菅優さんの魅力に溢れた1枚です。

図書館にはこれ以外にも何枚か小菅さんのCDがあるので、ぜひ聴いてみてください。そして、小菅さんのピアノが皆さんにとつて心に残る演奏であったとしたら、とても嬉しいですね。



請求記号●XD50783
超絶技巧練習曲集／フランツ・リスト
Sony Classical SICC 113

●ふさのゆつき…芸術の秋、読書の秋、食欲の秋、秋には様々な顔がありませんが、個人的には毎年花粉の秋です。今年は何もないことを祈るばかりです。